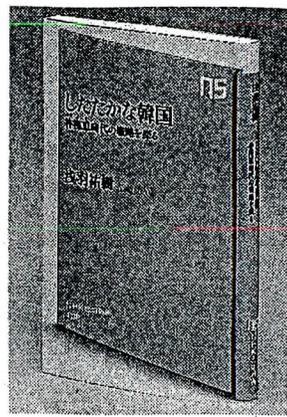


したたかな韓国

朴槿恵時代の戦略を探る

浅羽祐樹著

外交ゲームでの真の顔



(NHK出版・777円)

あさは・ゆうき 1976年生まれ。山口県立大学国際文化学部准教授。

著者にとっては欲張りな、読者にとっては豊富な本である。朴槿恵大統領の政治戦略、竹島問題、慰安婦問題といった韓国政治や日韓関係のテーマを題材に、韓国の「したたかさ」が論じられている。韓国の大統領は任期五年で重任できない。国会の解散もない。つまり、大統領を目指す政治家たちは5年という固定化した選挙サイクルに合わせて戦略を展開する。朴氏は党内予備選挙で李明博氏に敗れた2007年から、与党内野党として自らのポジションを差異化、虎視眈々と戦略を練ってきたのである。そして、今年2月、女性として初めて大統領選で当選。対立候補・文在寅氏を支持した30代以下の層に比べ、朴氏を支持した50代以上の層が構成人口でも、実際の投票率でも凌駕した結果だった。朴氏の戦略は、急速に高齢化する韓国社会における「シルバー民主主義」を視野に入れたものでもあったわけだ。

日韓の間に横たわる国際問題でも、韓国は外側から見える「強面」とは別の顔を持っていることを本書は教えてくれる。竹島問題では、『独島イ・ザ・ハーグ』の著者で、外交通商部の独島法律諮問官に就任した現職判事の鄭載玟氏に着眼。鄭氏は公には「領有権問題は存在しない」と頑なな姿勢を示しつつも、裏では国際司法裁判所に提訴された場合の法廷戦略を練っているという。慰安婦問題では、韓国の憲法裁判所が政府の静観を遺憾とした国内事情を踏まえ、「戦時下の女性に対する人権侵害」を中心に国際世論に訴える韓国政府の戦略を探っていく。真の解決を目指す「真実ゲーム」に対し、外交上の政治的駆け引きとして問題を考える「外交ゲーム」というメタファーを使って、著者が解き明かす韓国の戦略は実に明快だ。韓国は決して「わけのわからない存在」ではない。むしろ合理的に戦略を練る「したたかな存在」である。そして、これが現代の過酷な外交ゲームに挑むプレーヤーの真の顔である。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)